



# ウエディング退魔師

双辱の姉妹花嫁

立ち読み版

第一章 淫呪の乙女退魔師

第二章 暴かれた恥部

第三章 禍神の花嫁

第四章 魔悦の婚儀

エピローグ 玉依姫の長き午睡

006

078

145

192

267

## 登場人物紹介

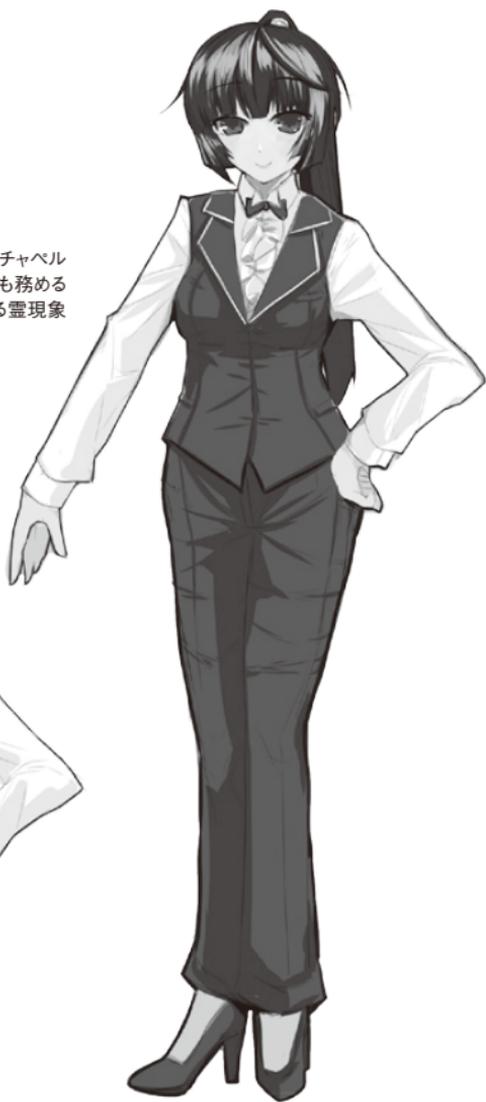
Characters



いちやなぎ かおる

### 一柳 薫

退魔師であり、ウェディングチャペル「アンジェ」の副支配人をも務める女性。チャペルで発生する霊現象などに対処する。



いちやなぎ もえ

### 一柳 萌

薫の妹。女子校生で、フラワーコーディネートをめざし、アンジェのスタッフとなっている。

「……もう、部屋に行くね。おやすみなさい」

「ち、違うの……そうじゃなくて……」

慌てて言葉を繕おうとしたが、少女は肩を落としてとぼとぼと階段を上っていった。

(……あんな事を言いたかったんじゃない)

リビングに残された女退魔師は、大きな溜息をついた。

(護りたいだけ……ただそれだけなのに、私ったら……)

自分に向けるべき苛立ちを、何も知らない妹にぶつけてしまった。

(萌には何の罪もないのに、八つ当たりしてしまった……)

一度は去ったとはいえ、あの男の霊体は再び姿を現すだろうという確信が薫にはあった。連れ出された倉田の魂の方は、もう使い道がないと思われたのか、病院の近くをほとんど消滅しかかった状態で彷徨っていたところを薫が再び封じ、白雪に見張らせている。それでも、歯車が、どこかで狂ったような気がして胸騒ぎが止まらない。

(私は……この数日一体何をしている……?)

正心の攻撃に備えて策を立てる必要があるのにもかかわらず、相変わらず淫欲に心を乱されている。萌の乱れた姿を思い出しながら、悶々と過ごしているのだった。

(それどころか、『処置』の時には萌の事を考えて……)

護らなければいけない相手を、欲望の対象にしている。目で、心で犯している。

(こんな事は……もう、やめなければ……)

何度も何度も言い聞かせる。自分への嫌悪で、吐き気が止まらない。なのに、気が付けば怒張を握りながら、頭の中はあの時の萌の姿を幾倍にも淫らに増幅したイメージで、いっぱいになっているのだった。

(……やっぱり、何かがおかしい。異常な事態が進んでいる……)

正心が現れてから、チャペルの周辺で不審な影の目撃が相次いでいた。そのたびに祓いに向かうが、出てくるのはせいぜい鼠ほどの大きさの妖魔数匹。特に攻撃を仕掛けて来るわけでもなく、すばしっこく逃げ回るだけだ。昨晩も散々走らされて、全て退治し終わったのは夜明け近くだった。あの時のような異様な靈気を全く感じる事もなく、徒労感だけが薫の身体を重たく包んでいる。

「何が目的だというの……?」

おかげでここ数日朝行もできていない。徹夜明けの腫れぼったい顔だけ何度も冷たい水で洗って、急いで事務所に向かう。

(んッ、どうしたんだろう、今朝は、すごく硬くなってる?)

鍵をかけたオフィスで制服に着替えながら、さっそく薫は後悔した。

(やっぱり、出してくるべきだった)

小物相手とはいえ退魔続きで、薫の男根はほとんど興奮しっぱなしの状態だった。こうしていても、苦しいというよりは、もう痛いくらいに、肉棒がショーツをはみ出さんばか

りに勃起している。事務所を警備している警備会社から侵入者の通報が入り、地元の署からパトカーがやって来る騒ぎさえなければ、一度くらいは『処置』ができたのに、と恨みがましく思い出しながら屈んだ途端、ズンツ、と甘苦しい衝撃が股間を直撃し、思わず声が出た。

「はうツ!!」

思わず周囲を見渡し、姿見の中の自分と視線が絡まる。もっこりと淫靡に膨らんだ白いショーツが、嘲笑うかのように目を射った。

(……もう……こんな身体……イヤだ……)

まるで下半身に心臓が移ってしまったかのように、ズクンズクンという脈動が、一層強くなる。少しでも気を緩めると思考力が、奪われてしまいそうさ。

(そうさ、トイレ……トイレで、すればいいんだ)

もっと早く気付けばよかったと思いつつ、慌ててトイレのある階に向かう。

幸いまだフロアには人の気配はほとんどない。一番奥の個室に駆け込み、もどかしくフアスナーを下げてズボンを足首まで落とす。

(……お、落ち着いて、お風呂場と同じようにすれば……汚さないでできるはず)

浴室以外で『処置』を行うのは、これが初めてだ。水で綺麗に流し去る事のできる浴室と違い、磨き上げられた床には塵一つなく、白い便器ですら光沢を放っている。それが一層の緊張を煽る。

(とにかく、出さないと……ッ)

シヨーツを下げ、怒張しきったペニスをファスナーに引っかけないようにして取り出す。直視したくないが、嫌でも目に入る。

(これが私の一部……はぁッ、先をパクパクさせて……なんて汚らしい……)

肉棒の全体的な色は、やや白みがかつた肌色だ。それが、ここまで射精を我慢していたためにいつもより反り返り、薄茶にピンクを重ねたような生々しい色に変わっている。最も目立つ鮮紅色の亀頭部分は光沢を放ち、まるで息づくように、鈴口が小さく口を開け閉めしている有様だ。

「んん……ッ」

右手で支えるように掴み、亀頭をなるべく下に向けようとするが、すぐにビクンと震えて反り返る。なるべく何も考えないように、機械的に手を動かす。

(はぁッ……ひよつとして、我慢しすぎた？ 苦しいのに、出てこない……ッ)

いつもと同じように力を入れているはずなのに、扱くたびに快感ばかりが増幅される。

「はッ、はぁッ、あッ」

囁んでいたはずの唇が、ぼつかりと開き、舌先がちらりと覗く。

(気持ちよくなりたいたいじゃない、出したいだけ……ッ、だから、早く出てッ！)

一秒でも早く出して、解放されたい。そんな思いが昂って、密室の中でいつもより大胆な動きになる。

(そ、そうよ……刺激が足りないのなら、もっと、別の場所も刺激すれば……)

副支配人は下半身の熱に促されるようにして、左手をおすおすと胸に当て、左の乳房をベストの上から拙く撫でた。

(んんッ……まだ足りない……？ 直接……触ればいいの……？)

初めて事務所で『処置』を行なう躊躇ためちいよりも、燃え盛る情欲の勢いの方が、遥かに勝っていた。薫はベストとブラウスのボタンを外し、ブラジャーの下にもぞもぞと指を入れて、乳房を揉む。

むにゅ……ッ。

(んはあん、はあ……ッ、これ、いつもと違うけど……ッ、はあ……いつもより興奮する……かも……)

初めて行う、乳房を愛撫しながらの自慰は、すぐに新しい官能として乙女の身体を虜にする。自分が女性である、という証であるはずの、その乳房の、柔らかく指に吸い付くような弾力と、それとは正反対の、滾る肉棒の凶暴なまでの硬さが、初めて知る倒錯の世界へと女退魔師を誘う。

「あ……ああ、はあ……ッ……」

これまでなら押し込めてシャワーの水と共に流していた快感が、むくむくと、どこまでも膨張していく。殺風景な浴室とは違い、ピンクを基調とした空間である事も、罪悪感と背徳感に拍車をかけていた。壁紙は、愛らしいオールドローズをモチーフとしたエンボス

の特注品だ。

(そういえば、オールドローズは萌の好きな花だったな……)

頭の片隅でそんな事を思った途端、理性が甦る。

(バカッ、こんな時にあの子の事なんて、考えるな……ッ！)

手を止めようとしたが、やっとな射精が近くなってきた肉棒は、筋を浮かせて解放を迫る。

「ああ、ッ、出そう……」

安堵にしては切なすぎる声個室に響く。

シユツ、シユツ、シユツ、シユツ……！

「あ、はあ、あああ」

快感に身を任せて身を仰け反らせようとした、その瞬間。ガチャッ。誰かがトイレに駆

け込んで来た。入口側の個室のドアが勢いよく閉まる音が聞こえ、慌ただしい衣擦れの音

に続いて、チヨロロロ……と元氣よく鳴り響く水音。

(そんな!? 今出したら、バレる……！)

だが、遅かった。

「ふんふん、ふんふん」

間違えるはずがない。昨日も耳にした、機嫌の良い時の妹の鼻歌だ。

(萌、どうしてこんな時にッ!?)

そういえば、空いている時間は、フラワーコーディネートの実技試験に向けて式場の花

や備品を使う許可を与えたのだ。個室一つ隔てた先で、姉が自慰に耽っていたなど知るはずもなく、便座に腰かけたままなのだろう、少女はまだ鼻歌を歌っている。水音はまだチヨロチヨロと鳴っている。

「ふーんふふんふふんふふん」

「ン、はッ、あうッ……ッ、くッ!!」

妹の放尿音を聞いているという羞恥が、あろうことか興奮を煽る媚薬に変容していた。突然予告なく貫くような射精感が迫り、乙女の全身はガタガタと震える。

「んふうッ、ふ、ふうッ……!!」

きつく眉を寄せながら身体を丸め、込み上げて来る絶頂感をなんとか押し戻そうとする。  
(出る……ッ、ダメッ! でも、手が、勝手に……ッ!!)

波打つ射精感は、僅かに残された理性さえも揺り動かし、易々と剥ぎ取っていく。

(こんなのって、いけないのにッ! 萌の隣でッ……ハァッ、萌の事考えながら出すなんて……ッ!)

クチュツ、クチュクチュ……ッ!

水の流れる音に隠れて乙女は喘ぐ。止まらない上下運動に合わせて、量を増やした先走りの露をピッピッと宙に散らし、罪悪感で泣きそうになりながら、押し寄せる快感の波に弄ばれ登りつめていく。

「……ん? なんか変な音がしたかも……」

ふいに萌の呟きが聞こえて、心臓が止まりそうになる。ペニスを握ったまま固まった副支配人は、息を殺し、祈るような気持ちで耳を澄ませる。

(萌、こつちに気付いちやダメ……ッ！ 早く行つて！)

寸止めの状態でビクビクと脈打つ肉棒の熱気が、隣の個室にまで伝わりそうで、薫は目をつぶって、押し殺した熱い吐息を漏らす。

「ン……ッ……ふう……う……ッ……」

(早く……行つてくれないと、はぁッ、だ、出せないのに……！)

生殺しのまま悶々としている姉がすぐ横にいても知らず、少女はやつと個室を出た。

「気のせいかなあ……ま、いつか」

洗面台を使う音が聞こえ始めると、女退魔師の手は、さっきよりもがむしゃらに動き出した。

(あぁッ、もうッ、はち切れそう……ッ、我慢できない！)

ジュッ！ ジュッ！ ジュッ！

摩擦で白く泡立った先走りが、粘つく音を立てて包皮の中に流れ込む。肉幹と包皮がニユルニユルと擦れ合つて、目の奥で白い星が幾つも爆ぜる。

「んはぁッ！ あッ！ あんッ、あぁあ……ッ！」

ペニスを扱く手も、乳房を揉みしだく手も、憑かれたかのように一層激しく動いていた。(あぁあ、もう、ホントにッ、出るッ、出る出る！ あぁッ、すぐそこに萌がいるのにッ、

精子ッ、出ちやうッ……!!)

ガクガクと取り憑かれたかのように動く腰が、止まらない。目前に迫った解放感に向けて、薫の身体は肉悦に激しく身震いしていた。

(ああ! でッ、出るうううッ!!)

込み上げて来る迸りに、つい、身を任せてしまった瞬間、

びゅるびゅるッ! びゅるびゅるびゅるるるッ!!

抑え込む間もなく、天井を向いた亀頭から、大量の白濁液がドブツと噴き出した。

「ッ! くッ、ひやうッ!」

のたうつホースのように脈動しながら吐精する肉棒は、まるでグロテスクな生き物のように、抑えようとする手から逃れ、便器に、壁に、所構わず精液をぶちまける。

びゅッ! びゅるるる! びゅるるるるーッ!

「あ、ひゃ……ッ、止まって……ッ!」

天井近くの壁のオールドローズにこつてりと白い汚濁が付着し、なめくじ蛞蝓のような緩慢さで床に流れていく。便器の中にも外にも精液は飛び散り、水の中にも白い霧のようにゆつくりと広がっていた。

「あ……ふぁ……ッ……ああ……そんな……私、なんて事を……」

ようやく射精が収まって、身体はこれまでにない絶頂感にまだフワフワと漂っていたが、あまりの惨状に女退魔師は言葉を失うしかなかった。訪れた人全員が快適に過ごせる



よう、施設の清掃には特に気を配るようにと日頃からスタッフに言い聞かせている自分が、女子トイレの個室を壁から床まで精液塗れにしてしまったのだ。

(こ、これ……どうしよう……)

射精の虚脱感とは別の眩暈めまいに襲われながら、思わず薫は後ずさっていた。

(すぐに綺麗にしないと)

物音はしない。既に萌は出て行ったようだ。あたふたと服を着直し、トイレトペーパーを引き出して、手にグルグルと巻き取る。

(他の皆が来る前に、早く……!!)

壁の白濁を拭うが、染み込んでしまった部分は色が変わり、誤魔化しようのない精液臭を放っている。

「なんて酷いニオイ……こんなんじゃ、全然落ちない……」

焦りすぎて、頭が全然働かない。やっと思いついて、掃除用具入れから洗剤入りのスプレーと雑巾、それとバケツを取り出す。

「お願いだから落ちて……」

何度も何度も洗いながら雑巾で壁を拭く。別の雑巾で便器も拭き取る。

「……うう……皆、ごめんね……」

何も知らずに次にここを使う人間にも、清掃スタッフにも、心の中で何度も何度も詫びながら、床に這いつくばり、点々と散る白濁を拭く。

(こんな恥知らずな事でキモチよくなるなんて……最低だ……)

毎日身を清め、瞑想をしても、性欲一つ抑えられず、我を忘れて神聖であるべき職場を汚してしまった。何よりも、妹がいると分かっていたのに、いや、分かっていたからこそ興奮して、射精してしまった

(萌のオシッコ、あんな音なんだ……初めて聞いた……)

チョロロ……という可愛らしい排尿音を思い出し、萎えきつたはずの肉棒が、また硬くなり始める。元の肉芽に戻ってくれる気配は、これっぽっちもない。

「くう……ッ、私は、本当に最低……だ……ッ」

ほんのりと紅くなった尻尻に、涙が滲む。這いつくばったまま、またファスナーに手がかり、やがてカチャカチャとベルトの音が響く。

押し殺した嗚咽が、短い喘ぎに変わり——それから三十分ばかりの間、個室のドアは一度も開く事はなかった。

床に四つん這いになったまま、パンプスを捜そうとすると、その腕が、グイッと持ち上げられる。

「やっ、離して！」

「ほら、まずはちゃんとシャグチ様にご挨拶をするんだ」

男の低い凄みを漂わせた声に、少女はビクリと身体を硬くする。

「大人しくしないで……喰われてしまうぞ」

その声に合わせたかのように、今度は部屋全体が明らかに蠕動ぜんどうした。

「ふ、ふざけないでっ、シャグチ様だかなんだか知らないけど、挨拶なんて誰が……」

床全体がゆっくり波打ったかと思うと、やにわにその中心が、沸騰した鍋の表面のようにブクブクとテニスボール大の泡を吐き始めた。

ゴポッ！

中年男は薄ら笑いを浮かべてその様子をじっと観察している。

ゴポ……ゴポゴポ……ッ！

泡はサッカーボール程にまで成長し、幾つも合わさって歪な球体を形成していく。

(うう……何よコレ……マジで気持ち悪いんですけど……)

「どうした？ 一柳の娘なら、蟲くらいは見慣れてるだろうに」

ふやけたかのような半透明の楕円の赤茶色の塊。そこからまるで体毛のように同系色の細い触手が生え始め、体液でぬめるその身体をどんどん覆っていく。触手の根元には、小

さな赤い粒がびっしりとついているのが気味悪い。

「……そりゃ、こんな蟲くらい……見た事、あるわよ……」

刻一刻と姿を現し始めた異形から少しでも離れたかったが、今動けば襲われると退魔師の知識が警告する。少女は恐怖からせめて気を紛らわせようと、眼前で蠢く物体が何かに似ていると考え始めた。

（この形、気持ち悪いんだけど……どこかで見覚えがあるような……）

今朝の食卓のシーンがふいに甦る。濃いめに入れた紅茶にスプーンでひと掬い苺ジャムを入れるのが、甘い物に目がない少女の毎朝のささやかな楽しみだったのだが……。

（あ、そうか！ この蟲……アレに似てるんだ……！！）

思い出しではいけないと理性が忠告したが、時既に遅く、まるでカップの底に残った潰れた苺のようだとはつきり思った途端、吐き気が込み上げて来た。

（う、思い出さなきゃよかった……ダメだ、もう、苺ジャムは絶対に食べらんないっ！）

つい口元を手で覆ってしまった途端、無数の粒達が一斉にぬらりと光り、少女を《見た》。  
「きゃあああ……ッ!!」

なんとか耐えていた少女だったが、今度こそは声の限りに絶叫していた。

「ヤダあ！ こっち見ないでえッ！」

赤茶色の蟲達が、こちらに頭を向けたまま、ゆっくりと動き始める。

「見るなッ！ 見ないでッ、こっち来ないで……ッ！」

片腕をむんずと掴まれたまま足をバタバタさせ、その反動で勢いよく尻餅をついてしま  
うが、萌は自分が座り込んでしまった事にも気付かず、叫び続ける。

「こ、来ないでよッ、来ないで……来るなあ……！」

一度恐慌状態に陥ってしまった少女の理性は、紅茶に入れた角砂糖のように、あつとい  
う間に崩れていく。

「あ、う……やッ、ヤダあ……ヤダよお……」

もう一度術を唱え印を結ぶどころか、歯の根すら合わない。ただ闇雲に首を振り、叫び  
続けるしかできなくなっていた。それでも、じりじりと迫って来る異形から少しでも遠ざ  
かろうと、両手の指を床に突き立てるが、力が入らず、指先が空しく弾力のある床でツル  
ツルと空回りする。

(ひ……ッ、ヤダよお……お姉ちゃん……助けて……)

腰から力が抜ける。太腿が弛緩する。

「あ、ああ……そんな……あ……」

か細い悲鳴が、カラカラに渴いた口から漏れる。

(……こんな事って……嘘でしょ……?)

くしゃくしゃになったドレスの下で、腿の付け根が力なく開いた。

ジョロ……ジョロ……。

恐ろしさのあまり、少女は失禁してしまっていた。小さなリボンに飾られた可愛らしい

白のショーツが、日差しを浴びた干し草のような、ホコホコとした香ばしいニオイと共に、たちまち薄黄色に染まっていく。

「フフフッ、随分と出すものだな……ニオイは……ふむ、なかなかイイぞ」

微かに立つ湯気のニオイをあからさまに嗅がれて、力なく首を振る。

「ああ、見ないで……はう……ッ、くうう……見ないでよお……」

いつもなら解放感しか覚えない生理現象に、少女は恥辱の極みにまで追い詰められていた。背中も、こめかみも、汗でぐっしりと濡れて気持ちが悪い。何一つ意のままにならず、絶望感でいっぱいだった。

(止まって……お願い、止まって……！)

なんとかして尿水が出るのを止めようと、何度も膣に力を込めるが、一旦決壊してしまった尿道は、だらしなく緩んだまま黄色い液体を垂れ流している。

チヨロロロ……。

萌は気付かなかった。床の、小水に濡れた部分が、赤く光りながら何かを吸収しているのを。そしてそのたびに、部屋全体がドクンと大きく波打つのも。

(うッ……、お漏らしなんて……恥ずかしすぎるよ……)

男の手がやっと離れても、少女はその場で固まったまま、自分のお尻がぐっしりと温かくなる感覚の中で、目に涙を浮かべていた。

床にレモン色の水溜まりができたところで、やっと長いお漏らしが止まった。

「おやおや、まるで小さな子供だな」

男が嗤うが、しよげ返った少女の耳には入らない。

「身体はもう大人の仲間入りだというのに……フフフッ、これは少し厳しく躡けてやらんといけないな」

一体何がそんなにおかしいのか、さっぱり分からない。ただただ恥ずかしさと悔しさで頭の中が真っ白だった。それで気が逸れていた。

「え？ や、な、なッ!？」

いつの間にか、親指ほどのずんぐりとした、赤いダンゴムシのような生物が、できたての尿溜まり目がけて群がっていた。

ピチャピチャピチャ……。

その水音が何を意味しているのか理解するのに、数秒かかった。

「の、飲んじやだめ……!」

潰れた苺のバケモノと同じように細く長い触手を仲間同士でゆらゆらと触れ合わせながら、物凄い勢いで黄色い水を啜っている。

「ヤダあ！ オシッコっ、わたしのオシッコ……ッ、飲まないでえッ!」

恐怖を上回る羞恥に、耳まで真っ赤になりながら、少女は足をバタバタさせるが、その間に尿溜まりはもう消えていた。そして、一回り大きくなった蟲達は、遡上する鮭のよう

に、少女の股間目指して殺到して来た。

「きゃあッ!？」

慌てて後ずさろうとしたが、時既に遅く、先頭の一匹が太腿に脚をかけていた。

「やだやだ来るなッ！ 来るなッ、いやあーッ!!」

ずしりと重いのは、尿水をたらふく腹に溜めているからなのか。床の上にいた時よりも遅くなった歩みで太腿を這い上がって来る感触に、鳥肌が首筋まで走る。

「ひ……ッ、取って……ッ！ この蟲、取ってッ!」

手で払おうとするが、力の入らない指先を嘲笑うかのように、蟲達は二匹、三匹と、次々少女の身体を登り始めた。シャカシャカシャカと無数の歩脚を鳴らす音が、やけに大きく鼓膜に響く。

「あー、これは気に入られてしまったようだなあ。そのまま静かにしていれば気付かれなかったものを……わざわざ牝の匂いなんか撒き散らして誘うからだ」

「誘ってなんかないよッ！ この蟲達が、勝手に……ひッ!？」

一見するとダンゴムシのような形を保ちつつ、時折ゲル状の塊に戻っては甘ったるい透明な粘液を身体から滴らせるこの生物からも、尋常ではない妖気が滲み出ている。そんな蟲にドレスの中にまで入り込まれ、柔らかなお腹の上で蠢かれて、少女は恐怖で顔を引き攣らせた。

「フフフッ、そんなに怯えなくても大丈夫だ。もうすぐ怖いのも分らないぐらい、気持

ちよくしてもらえぞ」

身悶えする少女を、男は爛々らんらんと光る眼で見据えている。その息は荒く、獣じみていた。

「あッ、やめて……ッ、な、なんか、変なトコに集まって……ッ!!」

意を決して少女は自分の下腹部を見下ろす。お腹の上から雪崩を打つようにして移動して来た蟲達が、薄黄色の水を含んで重たくなったショーツに群がり、幾本もの節足で押し下げ、下腹部と薄布の間に入り込んでいた。

「ひヤッ! あッ!! 入ってくるッ……!!」

女の子の大事な場所は、完全に無防備になっていた。そこに、生温かい肉塊が、幾つも張り付いているのだ。網の中の小魚のようにビチビチと蠢く蟲達で膨らんだショーツを見て、萌は卒倒しそうになった。

「もうイヤあ! こんな気持ち悪いよお……!!」

幼女のように泣き叫ぶ少女に、男は満足げに告げる。

「大丈夫だ。ただの蟲ではない。淫蟲だ……まだ男を知らない硬い蕾のような女陰も、一晩で牝蜜を垂らすようになる……女を躡けるための、フフッ、特別な蟲だよ」

「そんな蟲……ひっく……絶対、お……お断り……ッ……ンッ、ハアアンッ!!」

モコッ、モコッ、と盛り上がりながら蠢いていたショーツの膨らみが突如小さくなり、少女の声が甲高く裏返る。

「ひヤッ!! ソコッ、ダメッ! え? えッ!! ひやううう……ンッ!!」

何匹もいる中で、ひときわ大きく長い蟲が、仲間を押し分けるようにしてその丸い頭を姫割れに押し込んで来たのだ。

「あああッ!!」

熱く溶けかけたゼラチンのような、言いようのない奇怪な感触が秘部の入口で弾けて、心臓がバクバクと鳴り始める。

(怖いッ! こんな変なのがお腹の中に入ったら……ッ、わたしのッ、赤ちゃんのできる大事な場所がッ……メチャクチャにされちゃう!)

自分で触るのも躊躇う部分へ蟲が入って来るといふ恐怖に、少女の理性はまた掻き乱され、追い詰められる。

「あッ、入ったッ!! 入っちゃったよお……ッ!!」

「心配するな。その淫蟲はそれ以上中には入らない……条件が整わなければ、な」

膣道の入口で一旦止まった蟲は、思い出したように時折フルフルと動き、膣肉と身体を密着させると、外にはみ出した身体と尻尾をくねらせ始めた。

「動いてる! アソコの中で動いてる!」

まるでずり下がったショーツの代わりのように、紐状の赤黒い物体が、少女の秘裂にぴつたりと張り付いている。

「ああああ……取って……うッ、くう……ッ……取ってえ……」

ツルツルとした剥き卵のような下腹部に纏わり付いた蟲ショーツは、無残でもあり、煽

情的でもあった。

「その状態になった蟲は、もう自分では取れないな」

中年退魔師の冷酷な宣告が響く。

「一度腔に侵入すると、絶えず分泌液を出して、処女のまま稀代の名器へと作り替えてしまふ蟲だ……お前が発情すればするほど、その蜜と体温で成長し、大きくなる」

「ふぁッ!? う、動いた!?!」

男の言葉の半分も理解できなかったが、幼い腔壁をいきなり擦り上げられ、少女は驚きで腰を浮かせてしまう。それが、調教の始まりを告げる合図だった。

「あッ、また動いたッ!」

じわじわと、蟲はその身体を自在に伸び縮みさせながら、少女のまだ未開発な腔内へと本格的な侵入を開始した。

(あ、ああ……助けて……怖い……ッ……ハア……ッ……アソコが、熱いよお……)

怯えるしかない敏感な腔粘膜に、蟲は粘液をたっぷり絡ませながら進む。その効果はすぐに出始め、少女の狭い腔道は、熱い痺れに我を忘れたかのように、自らをくつろげ、蟲を受け入れ始めていた。

「はうッ、ああ……ッ……ダメ……ッ……」

気が付けば、脂肪も腹筋もついていないペタンとした薄い下腹部が、小さなとぐろを巻いた蟲の形に膨らんでいた。そのとぐろが動くたびに、少女は切なげな悲鳴を漏らすよう

になっていた。

「お前が感じなければ、その蟲は成長しない……くくくッ、結果が楽しみだ」

「感じてなんか……ッ、くひいッ!? ハアッ、こんなの……何も感じない……ッ、ハアッ……キモチよくなんか……ッ、ふああッ!?」

蟲が身体を動かすたびに、少女は唇をギユッと噛み締める。掌に爪を喰い込ませ、股間を意識が向かないようにするが、男は小娘のそんな魂胆をあっさりと見抜いてしまう。

「そんな蟲一匹じゃ物足りないだろう? これからじっくりとシヤグチ様の素晴らしさを教え込んでやるぞ」

「……ふえ……?」

ゆらゆらと動く影に気が付いて、萌は視線を移動させる。

(……こ……今度は、何なの……!!)

それは、さっきの蟲達のそれとは比べ物にならない程に長くて、そして大小様々な吸盤がみつちりとついた、蛸の脚のような触手だった。

「あれも、シヤグチ様だ……まだほんの一部だが」

「なっ……イヤああッ! こんなッ、絶対、絶対ムリいッ!」

少女の切羽詰まった視線の先で、数十本もの触手が、狭い肉色の部屋のいたる所から生え始めていた。

「やッ、離して! 離してよおッ……!」

宙をクネクネと蠢きながら伸びて来た触手が、ロープのように少女の両手首に巻き付き、キユウツと締め上げる。

「ひっ、な、何する気ッ!?!」

上半身だけが吊り上げられるアンバランスな格好のせいで、萌の双乳はドレスの胸元から零れてしまった。姉のバストよりはポリウムに欠けるが、それでも伏せたお椀のような上向きの乳房は、肌理の細やかさといい乳輪の色の淡さといい、普段の活発そうなイメージからはあまり想像のつかない、しつとりとした控えめな艶を漂わせている。

「きゃッ!」

シウルシウルシウル……!!

蛸の脚のように先が細くなつた触手が伸びて来て、ドレスの裾を器用に摘み、背中近くまで捲り上げた。触手の先から垂れた透明な粘液が、ポタポタとドレスに染みをつける。

「やだッ! 離してよこのバケモノ……っ!」

暴れた弾みで、ぷりんとした小さなお尻が丸出しになる。触手を外そうと懸命にもがくたびに、その割れ目の間では、淫蟲のショーツが蠢いて、少女の秘園にまた熱い粘液を噴きかける。

(ンハアッ……あまり動くと、アソコの蟲が……暴れて……ッ、中で熱いの、うッ、出て……くうッ!)

恐怖と恥辱で震え続けている剥き出しの四肢にも、触手の汁は垂れる。その汁を塗り込

むかのように、触手は少しずつ数を増し、少女の肌を撫で回す。

「うえ……ッ、このタコッ、キモチ悪い撫で方するんじゃないわよ……ドレスが、ハアッ、汚れちゃうじゃないの……ッ……」

ジワッ、ジワッ、と得体の知れない熱感が毛穴の奥にまで染み込んで来るのが、気持ち悪くて仕方ない。だが、悪態をついていた少女の吐息は、だんだん熱く妖しいものへと変わり始めていた。

（ああ……ッ、こんなベタベタ撫でられて、ソッ、くう……ッ、気持ち悪いのに……身体の中も、外も熱くて……早く……ハア……ッ、外して……よ……）

「やあ……ッ……離せ……バカ……ッ、ああッ、ソコは、撫でるな……あ……」

本人は威勢を保っているつもりだが、実際には、もう、ブツブツと独り言を言っているようにしか聞こえない。

「時間はたっぷりあるからな……シャゲチ様の素晴らしさを身体の奥まで味わうがいい」

修行と戦闘で鍛えられた姉とは違い、妹退魔師の二の腕はまだ幼さを残して、ふにふにと柔らかい。その肌触りを愉しむかのように、触手はことさらにゆつくりと巻き付き、何度も何度も撫で上げる。

（なんで、どうして……んはあッ、こんな事すんのよ……ッ、コイツ、わたしに何がしたいの……ああ……ン……全然、分からないよ……）

身体を這い回っているのは数十本の触手。だが、それを操り、恐らくは感覚を共有して

いるのは目の前に立つ中年男だ。恐怖と嫌悪感は相変わらず少女の頭を占めているが、そこにじわじわと別の感覚が入り込んでいた。

(……身体が……熱くて……ハァッ、苦しい……のに……くう……ッ、なんだか、ああ、胸が……ドキドキしてきた……)

男の視線を受けていると思うだけで、あたかも気になるクラスメイトに見られている時のように、心拍数が上がリ、まともに顔も見られない。

「み……ッ、見るんじゃないわよ……ヘンタイオヤジ……ッ……」

ドレスも肌も、今や触手の粘液でベトベトに汚され、互いに張り付いている。本来なら冷えて体温を奪うはずだが、この粘液はそれ自体が生きているかのように、いつまでも熱を保ち、肌の奥にまで入り込んで無垢な肢体を妖しく火照らせていた。

(なんなの、この感じ……?)

苦痛とはまた違った甘美さささえある甘苦しさに、心臓が高鳴ってくる。それに応えるかのように、股間の奥で淫蟲が熱い汁をドッと吐き出す。

(あッ、くはあ……ンッ……アソコが、熱い……い……)

触手に吊るされた少女は、いつしか太腿をもじもじと擦り合わせ、切なげな眼で中年男を見上げるようになっていた。

少女の乳房と桃尻を心ゆくまで視姦して、男はようやく触手を解いてやる。



（認めたくないッ！ この私がッ、こんな下劣な男に、はぁぁッ、オンナに、されてるなんて……ッ、でもッ、身体が、んはぁッ、全然ッ、言う事をきいてくれない……ッ！）  
 絶望しながらも、乙女の下半身は、意思を持っているかのようにうねり、牡肉を食い締める。子種を吸い上げながら、淫猥に鼓動する。

プシヤアアアッ！

ぶびゆるッ、びゆるッ！ びゆるびゆるッ……！

「あぁッ、萌ッ……見ないで……ッ！ お姉ちゃんのイクトコ、見ないでえ!!」

姫割れからは果実のような甘酸っぱい飛沫を、スプリングラーのようにはしたなく振り撒いて、陽根からは絞り立てのミルクのような白濁を噴き出して。美しい花嫁は、破廉恥なウエディングドレスを纏いながら、恥辱の潮吹き絶頂をさせられたのだった。

じゅりゅりゅッ、ぬちゅぬちゅッ……！

寄せては返す波にも似て、その音は繰り返し鳴っていた。ただ、波とは違うのは、その音が淫猥極まる粘つく水音だという点と、時折速くなったり遅くなったり別の音に入れ替わったりする点だ。

とろんとした顔つきで、薫は新しく右手に絡み付いて来た触手を握る。自分の手首ほどはあるその赤黒い触手の先端は、何本もの筋がうっすらと走る蚯蚓みみずの頭のようなグロテスクな形状をしている。そんな触手が、床いっぱいに何十本も蠢き、粘液を垂らしながら絡

まり合っている様は地獄の底のようなおぞましい光景だが、今の退魔乙女にとって、触手の群れも、そしてその本体も、淫欲の対象としてしか目に映らない。

(これが……シャグチ……)

チャペルの床を覆い尽くす触手の海。その中心で、ウエディングドレスの乙女は、今まさに邪神との交接を始めようとしていた。

(この淫気だけで……はぁッ……イってしまいそう……)

ぼとぼとぼと……ッ!

時折頭上から白濁液の塊が降り注ぐ。頬や胸元に落ちたそれは濃縮された淫臭を放って嗅覚まで犯し、ますます薫の頭から現実感を奪っていく。

「どうだ? 花嫁になれて嬉しいだろう? お前の霊力でシャグチ様を完全に復活して差し上げるのだ……名誉に思え」

得意げな正心の声が聞こえるが、それがどこから聞こえるのかも、分からない。身体を撫で廻す触手の束に身を任せ、いつしか薫は、鎌首をもたげて自分を見下ろす触手に向かい、自ら両脚を広げていた。

「……シャグチ様……ッ、どうぞ、私を、はぁッ……シャグチ様の、苗床として、お使い下さい……」

じゅりゅりゅ……じゅりゅ……ッ……。

「あ……ッ……!?!」

膺口を擦り上げるぬるぬるとした質感が、次第にごりごりとした馴染みのあるものへと変化していた。

「フフフ、それに一度貫かれれば、お前も完全に魔道に堕ちる……ああ、そういえばお前の可愛い妹の破瓜血の味も、それが知っているはずだ」

（そんなッ……！ 萌はもう、処女ではないと……!!）

邪神の愛撫に垂れ下がっていた目が、大きく見開かれた。

（……私のせいだ……！ 私がチャペルで不覚を取らなかつたら、こんな事にはならなかつたのに……!!）

改めて己の罪深さに打ち震える姉の、その身体を中心に、赤黒い巨大な塊がグイと押し広げる。

「あッ!? ひゃうう……ッ!？」

人間のサイズではないのに、その細部は悪趣味なまでに男性器を再現している。

「んあああッ、こんなッ、は、入らな……!!」

口ではそう叫んでいるのに、姫肉は、疑似男根にもう絡み付いている。脈打つ様子までが、くつきりと脳にまで伝わって、邪神とのおぞましい一体感に、いつそ失神してしまいたいとまで思いながらも、乙女は自分から腰を揺すり始めていた。

（こんなバケモノ相手ッ、私は……ああッ、どこまで堕ちるの……ッ……!!）

「なんでお姉ちゃんが、シャグチ様にしていただけなのよ……シャグチ様の花嫁は、この

わたしなのに……できそこないの分際で、ズルイ……!!」

不満げに頬を膨らませるのはドレス姿の少女だ。そう言いながらも、側まで来て屈み込み、姉の痴態をじつと見つめる瞳は、淫蕩に潤んでいる。

「そんな、オチンチンなんか付けて……ハアッ、そのくせエッチな顔しちゃって……」

膝をモジモジと擦り合わせ、左手で波打つ触手を、右手で自分の太腿を撫で廻している。  
(ンああッ、奥まで入って……ッ、熱い汁がッ、中でいっぱい出てる……う!)

物欲しそうな妹の様子を見ているうちに再び固くなっていた陽根に、別の触手がゆつくりと這い寄って来た。

(んッ? んあッ!? 今そつちまで弄られたら、絶対にッ、頭、おかしくされる……狂わされるッ!)

そう思っているものの、また人外の快感を味わえるという期待で、パブロフの犬にされてしまった乙女のペニスは、我慢汁をタラタラと吐き出し始め、太幹に隆々とした筋を浮かび上がらせる。

(ああ……ッ、次は、何をやる気なの……?)

亀頭の手前で、赤黒かった触手は鈍く光りながら半透明にその色を変えていく。先端も、グニグニと蠢きながら、輓轡わんくわの上で形作られる粘土のように筒状に伸び、そのまま肉棒をカポリと吸い込んだ。

「くひい……ッ!」

牝穴を蹂躪されるのとは全く違う種類の排泄感に似た官能が、乙女の背筋を駆け抜ける。

「吸うのダメッ！　すぐに出ちゃう……ッ、また、イっちゃう……！」

恥丘の毛穴にまでビタリと張り付いて、変形した触手はすぐさま吸引を開始した。

ちゆる……ちゆるるッ、むちゅッ、ちゅうううううッ！

「ひやあぁッ!?　そんなに吸っちゃダメえ！」

半透明の筒の中で、フタナリペニスが見る見るその色を濃くしながら吸引のリズムに合わせて上下する。

ちゅうッ、ちゅううう！　ちゅば、ちゅばあ……ッ！

（アソコも、オチンポも……ッ、こんな、好きにされたままイくなんてッ、悔しいッ！）

退魔師としての抵抗の気持ちも、二か所攻めの異常快感にはあえなく溶かされて、なすすべもなく乙女は魔触手の凌辱を受け入れていた。

「ううッ、お、お姉ちゃんッ！　自分だけ気持ちよくなって……ズルイ……ッ」

「見ているだけでは我慢できなくなったのか、萌がふらふらと抱きついてくる。」

「わたしも……あぁんッ、シたいよお……」

萌の熱っぽい吐息を感じ、それだけで、乙女の尿道は決壊した。

びゆるるるるッ！　びゆるッ、びゆるるる！

「あぁッ、ダメッ！　今触っちゃ……ッ、ひやうううんッ!!」

フタナリ退魔師は、蠢く肉オナホに射精をしながら腰を艶めかしくうねらせる。進む白



濁液がビュッビュッと中で飛び散るのがはつきりと見える。

「あはは、可愛い……お姉ちゃん、可愛いよ……」

「……はひい……ッ、もう、ダメ……許して……」

絶頂の快楽を受け入れまいとして、姉は苦しげに懇願する。しかしその顔は緩み、もうほとんど蕩けている。

「ン、ンンッ……ごめんッ、ま、まだ出るッ、全然止まらない……いいッ！」

びゆるッ、びゆるる！　びゆるる……ッ！

一旦収まるかと思つた噴出は、再び勢いを増す。

「止まらないッ！　とま……ッ、はああああッ！」

萌は、眉間を寄せて快感に耐えようとする姉の先端から、触手を引き剥がした。

「はあ……ッ、シャグチ様にこんな……すごいね、いっぱい我慢してたんだ？」

恥ずかしそうに頷きながら唇を噛む姉の分身を、掌全体で強弱を付けて執拗に責めてやると、ぱっくり開いた鈴口から面白いように白濁が糸を垂らす。

「ンふう！　ンふはああ……！」

開いた鈴口から、また白濁が零れる。

（ううッ！　止まらない……ッ、本当に全部、この子に絞られて……ッ!!）

尿道からだらしなく零れ落ちる白濁が、妹の下腹部との間に糸を引いているのが分かる。  
ぶちゅッ！　びゅぶぶッ、ぶにゆるるッ……!!

「ひっ……また出た……ッ……!!」

「すごい、お姉ちゃんの靈力ッ、全然なくならないねッ!」

うっとりとした表情で、先輩退魔師を見つめる少女。その天使のような微笑みが、小悪魔の淫蕩な笑みへと変わる。

「萌……ダメっ、こ、このままじゃ……」

絞り出すような声で妹に懇願するも、放たれた言葉は意外なものだった。

「ねえ、シャグチ様が完全に復活したら……わたし達の望みを叶えてくれるんだって……」  
悶える姉に抱きつくようにして、萌は優しく言い聞かせる。

「わたしは全然覚えてないけど、お父さんもお母さんも……昔のままで甦るって、叔父上は約束して下さったの」

「そんなまやかし、信じちゃダメ……だ……ッ」

快楽に溺れているはずなのに、まだ姉は眉間に皺を寄せる。それが憎らしいのか、萌はすぐに表情を曇らせる。

「お姉ちゃんは、お父さんにもお母さんにも会いたくないの？ 失った人に会いたくはないの？ シャグチ様の力で境界がなくなれば、あの世もこの世も一つになれるんだよ?」

脈打つ肉棒を、やわやわと扱きながら、玉依姫は女退魔師になおも執拗に誘いかける。

「ダメだ……境界を壊しては、ハアッ、いけない……ッ、どんなに会いたくても、悔いがあっても……それだけは、くう……ッ、やつちやいけないんだ……ッ……」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!





# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!



二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!